

第1回 大分県有識者会議（平成30年4月19日開催）概要

○会長・副会長の選任

「大分県有識者会議設置要綱」第5条に基づき委員の互選により、会長に竹村委員、副会長に小林委員を選任。

○議事

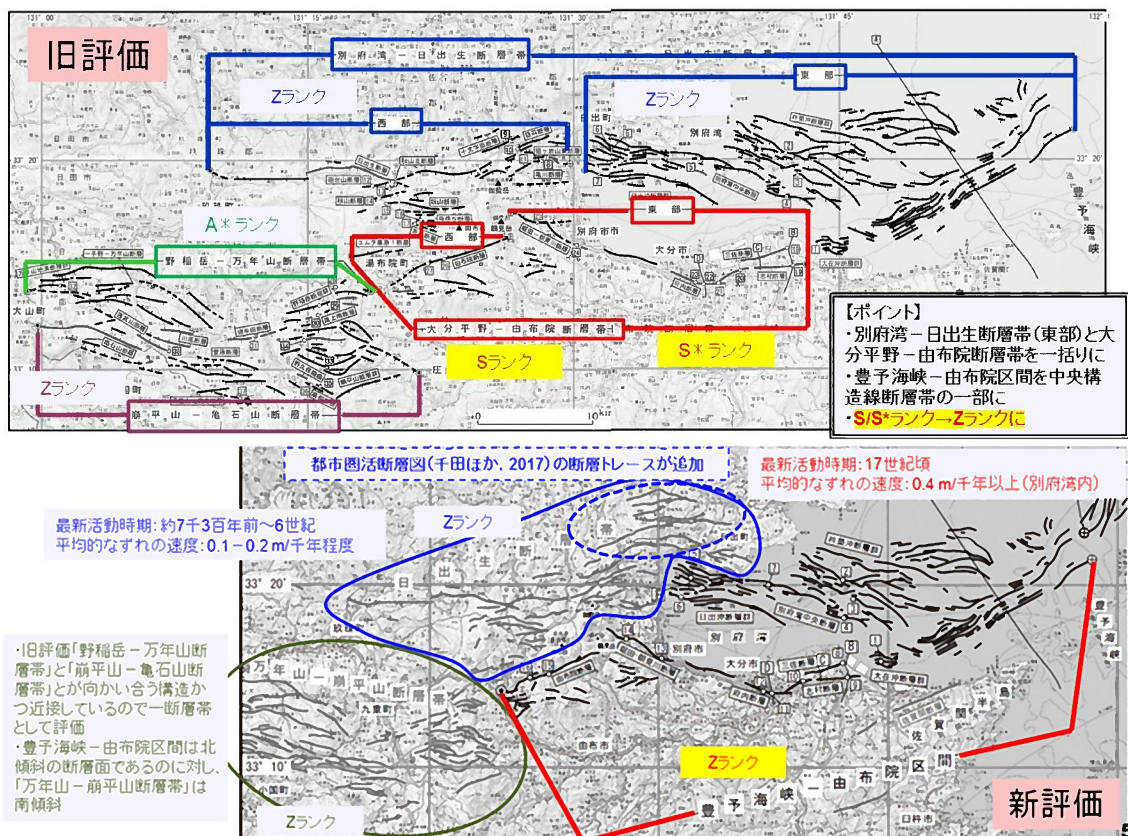
（1）検討課題について（大分県防災局）

- ・「中央構造線断層帯の長期評価」等の見直しに伴う県への影響について
- ・これまでの地震災害への対策を踏まえて、県民及び行政が今後取り組むべき対策

（2）県内の活断層について

①中央構造線断層帯の長期評価（第二版）について

（地震調査研究推進本部事務局）



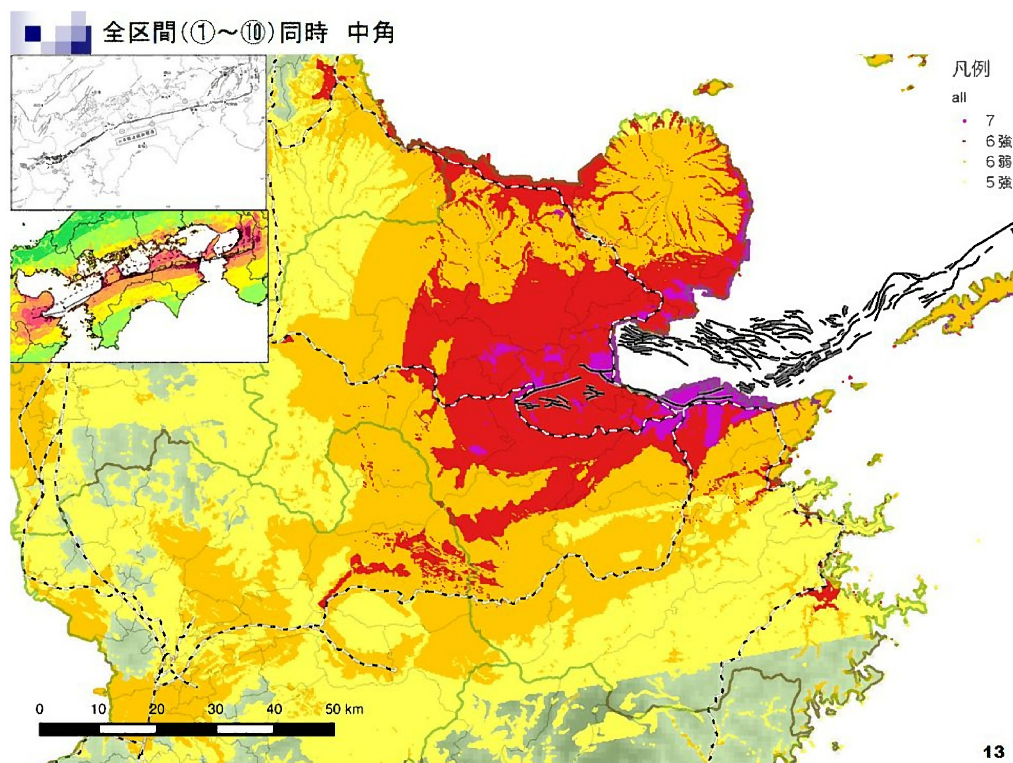
- ・地震発生確率がSランクからZに低下した理由

最新の活動が17世紀に発生していると認められ、活動周期からZランクになった。ただし、府内断層と志村断層では17世紀の活動が認め

られない。想定のもM7.8よりも小さな地震が発生した可能性。将来、「割れ残り」による地震発生の可能性は否定できない。

- ・ 全区間が連動した地震の発生について

過去の履歴からは、全区間が連動した活動は認められないが、理学的に見て否定はできない。



- ・ 震度分布図について

現在、公表している分布図は、簡便法によるもの。簡便法は、端点と端点を結ぶ矩形をモデルとして、将来、どのような地震の揺れの広がりをもたらさるかイメージするためのもので試算値。

正式な震度分布図では、活断層をセグメントごとに分け、アスペリティーの設定を細かく行うなど詳細法にて公表予定。(例年4月か5月)

(委員からの意見等)

- ・ 震度分布図は、詳細法で行ったものを公表する前に、簡便法で行ったものが公開されることで県民が混乱するのではないか。
- ・ 地震発生の確率が下がったことで、逆に防災対策上はリスクが高まったのではないか。
- ・ 「大地の記録」からは「17世紀頃」と評価されているが、一方で「人間の記録」からは、慶長元年(1596年)の慶長豊後地震の記録が残されており、双方が補完し合う関係であってよかったのではないか。

②「別府一万年山断層帯（大分平野一由布院断層帯東部）における重点的な調査観測」について（吉見委員）

まとめ

別府一万年山断層帯重点調査の主な成果は以下の通り

観測事実および解釈

- ・大分平野域および別府北部域の断層は右ずれの影響下にある断層.
- ・慶長豊後地震(1596年)時に, 別府湾南岸の断層も活動した可能性が高い.
- ・別府扇状地前面海域および大分川河口沖海域に, 流山地形が存在.
- ・別府湾東部において深さ10-12kmで正断層型の地震が発生.

地震動予測のためのモデル化

- ・各種探査・観測記録を基に, 大分県域の3次元速度構造モデルを作成.
- ・豊予海峡～別府湾南岸を震源断層に設定. 別府湾域の変位場を説明可能.
- ・動力学的シミュレーションを取り入れた震源モデルを設定し強震動計算を実施

地震動予測結果

- ・大分平野および別府の低地では100cm/sを超える地震動が想定される.

③これまでの県の取組について（県防災局）

大分県の地震津波対策の主な取組や想定地震及び「大分県地震・津波アクションプラン」について概要説明。

○まとめ（会長）

- ・第1回目としては現状の整理を行った。
- ・現状の「県地震被害想定」を見直す必要がある。熊本地震では県内でも活断層地震の被害が出ており、中央構造線断層帯との関係を含めて県内活断層の確認が必要。また、前回の被害想定から10年近く経過し、社会構造およびインフラにも変更があるため再評価が必要。
- ・今後、どのような起震断層が県内でおこり得るのかをベースにした被害想定を議論。